

社会科学古典資料センターをとりまく状況の変化と課題 —— 助教着任の挨拶にかえて ——

The Challenges for the Center for Historical Social Science Literature

馬 場 幸 栄

BABA Yukie

2017年9月1日付で一橋大学附属図書館研究開発室助教に着任し、同時に社会科学古典資料センターも担当させていただくこととなりました。2018年に創立40周年を迎える社会科学古典資料センターに勤務できることは、ひとりの書物史研究者として大変な名誉であると考えています。しかし、同時に大きな責任も感じています。と申しますのも、社会科学古典資料センターを取り巻く状況はこの40年のあいだに大きく変化し、それに伴い本センターは現在、大小さまざまな課題に直面しているからです。

まず大きな変化として挙げられるのが、組織体制の変化と閲覧予約制度の導入です。かつて社会科学古典資料センターには専任教授1名と助手2名がいました。しかし、専任教授のポストは数年前に廃止され、現在では他部局の教授が兼任する形をとっています。さらに、助手2名のポストも2017年度末で廃止され、2018年度からは助教1名が、これまで二人の助手が行っていた業務をひとりで担当することになります。このような組織体制の変化に対応するため、本センターでは2017年7月からオンラインでの閲覧予約制度が試行され、同年10月本格導入されました。平日9時から17時のあいだであれば予約なしに来館して閲覧できた従来の方法に慣れている利用者の方々にはご不便をおかけしますが、利用者の皆様に確実に貴重書を閲覧していただくためにぜひウェブサイトからの閲覧予約にご理解ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

つぎに挙げられるのが、社会科学古典資料センター内に設置されている保存修復工房の役割の拡充です。1995年に創設された保存修復工房には現在4名の非常勤修復師が配置されており、毎日1～2名ずつ交代で勤務しています。西洋貴重書の修復工房を持つ大学は世界的にも珍しく、工房には頻繁に大学・図書館関係者が見学にやってきました。保存修復工房の主たる役割はセンターが所蔵する貴重書に劣化予防処置や修復を施すことですが、西洋貴重書の劣化予防および修復に関する知識・技術を広める活動にも同じくらい力を入れており、大学図書館関係者らを対象とした3日間集中の「西洋古典資料保存講習会」、中高校生を対象とした1日集中の「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKEN」などの各種イベントにおいて講義や実技指導を行ってきました。近年は国内各地の大学図書館等から保存修復工房の教育的役割に対する期待がいっそう強まり、2016年度から新たに「保存実務研修」という長期研修受入制度も開始しました。国会図書館、慶應義塾大学三田メディアセンター、北海道大学附属図書館、大阪大学附属図書館、九州大学附属図書館、東北大学附属図書館の職員が既にこの制度を利用して数週間にわたる研修を工房で受けており、2018年度も複数の大学から研修生を受け入れる予定です。ただし、保存修復工房の運営にかかる費用は現在、文部科

学省共通政策課題「文化的・学術的な資料等の保存等」における「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」(平成28年度—平成30年度)予算でまかなわれています。この事業は2018年度に完了してしまいますので、2019年度以降も工房を運営しつづけるためにどのように予算を確保するかが大きな課題です。

社会科学古典資料センターには海外の研究者・大学図書館からの閲覧希望やレファレンス質問も多く、国際的役割が大きいのも特徴です。海外や国内の遠隔地にいらっしゃる利用者のアクセシビリティを高めるためには目録や収蔵資料の高精細画像をインターネット上で公開することが有効です。しかし残念ながらギールケ文庫やベルンシュタイン・スヴァーリン文庫などの書誌データを附属図書館OPACに入力するための予算はまだついていません。また、本センターは早期に貴重書の一部をデジタル撮影してインターネット上で公開してきましたが、それらの画像を閲覧するためには利用者が自分のPCにDjVuファイル閲覧用プラグインをインストールする必要があります。現在その煩雑さが問題になっています。DjVuはいまよりもずっとインターネットの通信速度が遅くPCのメモリも小さかった時代に高精細画像ファイルを閲覧できる形式として一部のアーカイブズや図書館で採用されました。しかし、その後インターネット回線の高速化とPCスペックの向上によりDjVuを用いなくともJPEGファイルなどで高精細画像が閲覧できるようになりました。本センターも国内外の利用者の利便性を高めるために、DjVuプラグインを必要としない方法で利用者が貴重書の高精細画像を閲覧できるよう公開方法を改善してゆかなければならないでしょう。

アクセシビリティに関して言えば、社会科学古典資料センターのバリアフリー化も大きな課題のひとつです。センターの入り口は階段になっており、スロープがないため、車椅子の利用者がひとりで入館することができません。閲覧室や保存修復工房も通路が狭く、車椅子のまま移動することが困難です。日本では2016年4月から障害者差別解消法も施行されており、このような物理的バリアは一刻も早くセンターから取り除く必要があります。

建物や設備の劣化・故障も深刻です。じつはかなり前から本センターの3階から屋上へ続く階段の内壁が劣化し、一部が剥落してしまっています。その箇所には錆が染み出している様子を見て取ることができますので、おそらく高湿度により壁の内部にある鉄筋が錆びて膨潤し、内側から壁を押し出しているものと推察されます。原因はおそらく、何年も前から指摘されている屋上の水はけの悪さであろうと考えられます。先日施設課が破損した壁の点検をしてくれましたので、近いうちに修繕してもらえるものと期待しています。本センター貴重書庫の温度と相対湿度を監視するためのデータロガーとモニターも以前から故障したままで、やむなくアナログ式の温湿度計のみでチャート紙に温度と湿度を記録しています。こちらも施設課に修繕をお願いします。

最後に課題として挙げなければならないのが、一橋大学の教育・研究における本学コレクションの活用です。本センターは学外からの評価は非常に高いのですが、それに比して学内では十分な評価が得られて来なかったと言われています。たとえば、本センター利用者のうち学部生が占める割合は低く、本センターとその収蔵コレクションの重要性が学生たちに浸透していないことがうかがえます。そこで2018年度は春夏学期および秋冬学期に学部生向けの書物史研究に関する科目を開講することにしました。授業を通して本センターのコレクションに実際に触れてもらいながら、書物史研究の楽しさを知ってもらえればと考えています。

このように社会科学古典資料センターは現在多くの課題に直面していますが、非常にユニークな貴重書図書館および研究教育機関として国内外の大学・図書館関係者から常に注目されて

おり、本センターに対する期待は大きくなるっぽうです。そうした期待に少しでも応えられるように、また、これまで本センターを支えてこられた諸兄弟の想いを次の世代へと伝えられるように、粉骨砕身の覚悟で努めてゆきたいと思います。

(一橋大学附属図書館研究開発室助教)